

太平記卷第八

- 一 摩耶合戦のかつせんの事
- 一 赤松京都寄あかまつきやうとよせの事
- 一 禁裏仙洞きんりせんとう御じゆほう法の事
- 一 山門京都寄やまかづやうとへよする事
- 一 四月三日合戦かづせんの事
- 一 千種殿合戦ちくさだのかつせんの事ならびにたにの谷だう堂の事

太平記卷第八

摩耶合戦  
まやのかつせんのこと

六波羅勢、摩耶を攻める

先帝船上着御、隠岐前司合戦打負し  
 せんでいすでにふなのへにちやくぎよなりて、おきのせんじかつせんうちまけし  
 後、近国武士皆馳参、出雲伯耆早馬頼波  
 のち、きんごくのぶしどもみなはせまいるよし、いつも・はうきのはやむましきなみ  
 うちて、六はらへつげたりければ、ことすでにちんしにをよびぬと、きく人いろ  
 をうしなへり、これにつきてもみやちか「きところ、かたきのあしをためさせ  
 てはかなふまし、まつつの国まやのじやうへをしよせて、あかまつをたいぢすべし  
 とて、さゝきはんぐはんとときのぶ・ひたちのせんじときとも、三井てらのしゆと・  
 在、京等相添都立、二月一日のうのこくにまやのじやうの  
 ざいきやう人とうをあひそへて京とをたちて、  
 みなみのふもと、いくたのにしよりそよせたりける、

赤松入道これをみて、わざとかたきをなん」じよにおびきよせんために、  
 あしがのいて一、二百人ふもとへくだし、とをやせうくいさせて、じやうの  
 うへ、ひきあがりけるを、よせてかつにのりて五千よき、さしもけはしきみなみざか  
 を、じんばにいきをもつがせず、もみにもうでぞあげたりける、この山へのぼるに  
 なまがりとしてけはしきほそみちあり、このところにいたりて、よせてすこしのほ  
 り。

1 九良さゑもん―底本「九良さゑん」。

2 二のおより―底本「二のおより」。

六波羅勢の惨状

3 けいこく―武田本「荆棘」。

りかねてさ、へたりけるところを、赤松律師則祐飽間九良  
 左衛門二人、みなみのおさきへおりくだりて、やたねをおしまささんぐにいけ  
 るあひた、よせてすこしいすくめられて、たがひに人をたてになして、そのか陰  
 かくれんといろめきけるきよくを見て、あかまつにふだうのしそくしなの、かみ  
 のりすけ・ちくぜんのかみさだのり・さよ・かうづき・こでら・とんぐうの一たう  
 五百よ人、」ほこさきをならべてたいさんくつる、ことくに、二のおよりうち  
 でたりけるあひた、よせてあとよりひきたて、かへせといへ共きいれす、我さき  
 にとにけはしる、

そのみちあるひはふかたにして、ばていひぎをぬきあへず、あるひは又けいこく  
 おひしげりて、ゆくさきいよくせばければ、もちたるゆみにせきおとされて、あと  
 なるむまにふみころされ、すねあてをしないでにふみいれて、たち」なからかたきに  
 刺殺ころさる、さればじやうのふもとより、むこがはのしのはたまでみち三里か  
 あひだ、むま人うへがうへにかさなりしにて、ゆく人みちをさりあへず、むかふとき  
 は七千よきときこえし六はらせい、わづかに千きにたにもたらで、はうく京へにげ  
 のぼりければ、六はらきやうぢうのさはぎなのめならず、しかりといへども、かたき  
 きんごくよりおこりて、したがひたるせいさまでおほしとも」きこえねば、たとひ一  
 度度勝乗、なにほとのことかあるべきと、ぎやうてんのきをと

円心、危機を脱する

4をいて―武田本「出テ」。

りなほして、さまざまはさばがぬ人もあり、  
 かゝるところに備前国地頭家人も、大りやくみなかたきになりぬと  
 聞きこえければ、まやのじやうへせいかさならぬさきに、かさねてうつてをくだせと  
 て、おなしき二月廿八日に又一万よきをさしくださる、あかまつにふだうこれをき、  
 て、せうぐんのり、はかりことふいにをいて大てきのきをしのぎて、しゆゝに  
 変化先酒部陣波羅勢卒摩耶城出聞  
 へんげしてさきんずるにはしかじとて、三千よきをそつし、まやのじやうをいで、  
 久々智・さかべにちんをとる、三月十日、六はらせいでせがはにつきぬときこえ  
 ければ、かつせんはみやうにちにてあらんすらんと、あかまつすしゆだんして、一  
 村雨過物具露干僅在家込入  
 りて、あめのはれまを「まちけるところに、あまがさきよりふねをとめてあがりける  
 阿波小笠原余騎押寄赤松僅船泊上  
 あはのをがさはら、三千よきにてをしよせたり、あかまつわか五十よきに、大  
 勢中懸面振敵凌笠符  
 せいのなかへかへかけ入、おもてもふらすたたかひけるか、大てきしのぐにかなはねは、  
 四十七きはうたれてふし六きになりけり、六きのつはものとも、かさしるしをか  
 ぐりすて、大せいのなかへぎつとまじりてかけまはりけるか、かたきこれをしらて  
 やありけ「む、又みやうのたすけにやありけん、いつれもつゝがなくして、みかたの  
 勢昆陽野宿東余騎控味方  
 せいのこやの、しゆくひがしに、三千よきにてひかへたる、そのなかへはせ入て、  
 虎口死逃中馳

瀬川の合戦

5底本、以下乱丁あり。第9丁へつづく。

6うばひつべしとて―武田本「奪レツヘシトテ」。

7た、かひては―武田本「戦テ」、西源院本「戦ハテ」。

8みたり―武田本「進タリ」。  
9底本、以下乱丁あり。第6丁へつづく。  
10こだてに―底本「こたで」。

六はらせいは、きのふのいくきにかたきようゑいを見るに、こせいなりといへ  
 共あざむきかたしと思ひければ、せがはのしゆくにひかへてすゝみえず、あかまつ  
 は又はいぐんのしそつをあつめ、をくれたるせいをまちと、のへんために「かゝら  
 ず、たがひにぢんをへたてゝ、いまたしゆうをけつせず、ていさうそゝるにぐんりよ  
 につかれは、かたきにきをうばひつべしとて、おなしき十一日、あか松三千よき  
 三百なかれ、こすゑのあらしにひるかへして、そのせい二、三万きもあるらんとみえ  
 たり、みかたをこれにあはすれば、百にしてその一、二をもくらべかたしといへど  
 も、」た、かひてはかつべきみちなければ、ひとへにたゝうちじにとこゝろざして、  
 筑前守貞範佐用兵庫助友宇野能登守国頼  
 ちくぜんのかみさだのり・さよひやうごのすけのりとも・うののとかみくにより・  
 中左衛門光能郎等騎竹陰南  
 なか山五郎さゑもんみつよし、らうとうともに七きにて、たけのかけよりもみなみの  
 山へうちあがりて、みたり、かたきこれを見てたてのはをすこしうごかして、かゝる  
 かとみればさもあらず、いろめきたるきしよくにみえけるあひだ、七きの人む「ま  
 よりとびており、たけの一むらしげりたるを、こだてにとりて、さしつめひきつめ  
 さんくゝにぞいたりける、せがはのしゆくなんぼく三十よちやうに、くつのこを  
 打ちたるやうにひかへたるかたきなれば、なにゆへにかのかるゝや一すちもあるへ  
 き、やころにちかつきたるかたき廿六き、むまよりさかさまにしておとされければ、